

序章

— 本論の構成 —

本論は現代日本語における動詞の自他に関わる諸問題を論じるものである。日本語学において、自動詞と他動詞の問題は多様な観点から多様に論じられてきたが、本論における論点は大きく次の2点に分けることができる。

第一点は動詞の自他対応の位置づけに関してである。自他対応の定義などについては後に詳述するが、自他対応とは、「重なる (kasan-ar-u)」と「重ねる (kasan-e-ru)」にみられるような、語根を共有する自動詞と他動詞のペアのことである。しばしば指摘されてきたように、自他対応と受動や使役との間には形態や意味の面で少なからぬ関連性を有している。本論は自他対応を受動や使役と同等の資格においてヴォイスの体系の中に位置づけることによって、日本語のヴォイス全般に関しても、自他対応に関してもより深い理解を得ることができると考える。

第二点は自動詞と他動詞のそれぞれの領域における意味の広がりについてである。自動詞と他動詞の最も根本的な相違は目的語の有無という点に求められようが、両者はそれぞれがそれだけでは決して片づけることのできない特有の意味の広がりを見せる。本論はこの問題を特に意味的に透明度の高い（つまり動作や結果の状態などのあり方が特定化されていない）語彙項目に注目することによって論じるものである。意味的に透明度の高い語彙項目は他の語彙項目と異なり、語の意味の特定化からくる制約を受けることなく、多様な意味拡張が可能であるからである。

本論は以下のような構成である。

第 I 部 動詞の自他対応とヴォイスの構造

第 1 章 ヴォイスの体系と動詞の自他対応

第 2 章 相対自動詞と受動態

第 II 部 自他対応の原理と意味構造

第 3 章 自他対応の成立条件

第 III 部 自動詞的表現の諸相

第 4 章 「変化」を表さないナル

第 5 章 ナッテイルによる単純状態の叙述

第 IV 部 他動詞的表現の諸相

第 6 章 行為を表す動詞をめぐって

第 7 章 他動詞表現と介在性

第 I 部は動詞の自他対応のヴォイスにおける位置づけについて論じる。第 1 章では、日本語のヴォイスの全体像について、先行研究の概観とその問題点の検討を行い、プロトタイプによるヴォイスの規定を試みる。また、このような作業を通して、自他対応が受動や使役とともに「主語を中心とした関与者と動詞の示す動きとの関係に対立的に示す」という機能を共有する形態的なカテゴリーであることが明らかにされる。第 2 章では、第 1 章における議論を承けて、相対自動詞（自他対応を有する自動詞）と受動態の関係をより具体的に検証することによって、自他対応と文法的ヴォイスの関係を考える。

第 II 部は、第 I 部が自他対応と他のカテゴリーとの関係を論じたのに対し、自他対応の内部の成立要因について考える。動詞というカテゴリーは自他対応の有無に応じて、「相対動詞」と「絶対動詞」に分類することができるが、自他対応という現象によって積極的に規定される「相対動詞」にこそ、自他対応の原理に

裏づけられた有意義な特徴をみいだすことができる。

第Ⅲ部は、自動詞ナルの意味領域の広がり进行分析・記述する。数ある自動詞の中でも、ナルは対象の変化の結果の状態のあり方などが特定化されていないという点で、変化自動詞の代表的な語彙項目である。ナルは普通は主体の「変化」のプロセスを述べる語彙項目として理解されるものであるが、一見したところ、「変化」の意味が感じられない用法も多く見受けられる。本論はナルの基本的な意味が現実世界からさまざまに拡張されることによって、多様な意味領域を獲得するものとする。第4章ではナルのアスペクトの無標形、第5章はナルのテイル形を扱う。

第Ⅳ部は他動詞的表現の諸相を論じる。第6章は他動詞的表現の中で意味の透明度の高い「(ヲ)スル」と「ヤル」という2つの形式に注目して、両者の異同を明らかにすることによって、これらの本質的な性格を考える。第7章は当該の文においては決して表現されない存在を介してある行為を実現する「介在性の表現」について、その基本的な性格と成立要因を明らかにする。この種の表現は自動詞文にはみられない他動詞文に特有の現象である。本論はこの種の表現の成立に「事態の結果のコントロール」と「動詞の意味的焦点」という2つの認知レベルの要因が関与しているものとする。